

22. 家政学の本質と体系

大妻女子大 前川 当子

家政学関係の研究 Report をみると大別して次の3種に分けられる。(1)個々の具体的現象の研究(2)教科教育法に関する研究(3)家政学原論の研究である。なかでも原論的研究は数が甚だ少い。学問として根本的原理の探求がおろそかにされていることは、家政学が独立した科学となる機会を一層遅くする原因の一つではなからうかと私見して、この問題について approach をすすめたい。

かつて、家政学の本質についての研究で次のような見解が発表されている。(1)営みの科学(2)生活科学(3)欲望論(4)経営の学問(5)規範の学問である。等々；しかしながら家政学の研究対象を家族ならびに家庭生活であると限定すれば、上述の本質論は、家政学の一側面を捉えているに過ぎないと考えられる。何故なら、家族を構成する人間そのものが肉体的存在でありかつ精神的存在でもある。家庭という場において諸々の因子が平面的に空間的にそして時間的にも働きあう、さらに、これをとりまく環境は常に変化し発展し、また時に停滞する。このように異種の因子が関係しあうところに家政学は存在しなければならない。しからば、家政学は科学の延長線上にあるのか、それとも次元のちがったところに成立するのかあるいは、家政学は他の科学と異った組織体系を持つものか、先に発表した仮説=適応概念を中心として、隣接諸科学の関係を解明しながら家政学独自の分野とその本質ならびに、今日の家政学の体系を示すことにする。